

2023年度研究会活動助成制度成果報告

歴史社会学研究会

社会学研究科D1, M1, 先端総合学術研究科M2

【研究会の目的】

歴史社会学の方法論に関する議論及び歴史社会学的研究を行う諸研究を概観することで、歴史社会学の研究手法を検討する

【今年度のテーマ】

- 1, 歴史社会学を名乗るには何が必要なのか、歴史学とは何が異なるのか
- 2, 歴史社会学の研究で計量を使う必要があるのか
- 3, 先行研究をどのように位置づけるか

【今年度扱った主な文献】

- ・赤川学・祐成保志編, 2022『社会の解読力〈歴史編〉』新曜社.
 - ・野上元「序章 社会学が歴史と向き合うために」2015, 『歴史と向き合う社会学——資料・表象・経験』ミネルヴァ書房.
 - ・池松玲子, 2020, 『主婦を問い直した女性たち——投稿誌『わいふ/Wife』の軌跡にみる戦後フェミニズム運動』勁草書房.
 - ・林凌, 2023, 『「消費者」の誕生: 近代日本における消費者主権の系譜と新自由主義』以文社.
- など

1, 歴史社会学の学術史

- ・1930年代に輸入され、1990年代ごろから嚆矢としての研究が登場する
- ・社会科学の「総合/隙間」としての歴史大きな社会現象を説明or 経済学や政治学で扱われないテーマ (社会問題、大衆文化、メディアなど)
- ・「記述的な研究」
データ数が限られており、影響を与える要因が多すぎる
→一般化した因果関係を明らかにすることは難しい
→社会自体を記述することが重要

2, 計量的手法を使う必要はあるのか

- ・何十年にも渡る大量の資料を扱う
→計量的手法を使わないのか?
→データの選択は恣意的でないのか?
⇒概念史では一定程度使えるか
- ・質的なものを数量化する基準に疑問
- ・インタビューを行う研究で計量的手法を使うことは多くない
⇒歴史資料を扱う研究で地道に資料を読み解く研究の意義を説明する参考になるのではないか
- ・歴史のストーリー性を描くことも重要

3, 言説史研究の先行研究の位置づけ

- ・言説史/概念史研究は、ある言説を前提としていた研究蓄積があるなかで、その前提としている言説自体に疑問を投げかける
→概念が構築過程を扱う狭義の先行研究が少ない
⇒広義・狭義の先行研究群に分けた検討が必要 (狭義のものは注で扱われるレベルの議論になることも)
- ・インタビューと異なり、事前に問を設定しても資料が見つからないことも
⇒最終的には資料を検討してから、広義の先行研究が確定していくのではないか

【今後の課題】

- ・歴史社会学的研究の中でも、使われる具体的な手法や分析視角は多様であり、類型化できる可能性がある
- ・歴史的事象を扱う意義、記述・分析の仕方は、歴史学や現代を対象にした社会学の研究から一部参考になる点があると思われる
⇒今後は、歴史社会学として蓄積された研究を読み解く一方で、歴史学・その他の社会学的研究も本研究会の問題意識から読み解くことで、歴史社会学のさらなる理解が深まると考えられる。